

PD-39 肺大細胞神経内分泌癌 9 切除例の検討長崎大学 医学部 第一外科¹⁾, 長崎大学 医学部 附属病院 病理部²⁾○永安 武¹⁾, 村岡昌司¹⁾, 赤嶺晋治¹⁾, 岡 忠之¹⁾, 綾部公懿¹⁾, 林徳真吉²⁾

1996 年から 2000 年の 5 年間の原発性非小細胞肺癌手術例 395 例中, 大細胞神経内分泌癌は 9 例 (2.3%, 男性 7 例, 女性 2 例, 平均年齢 63.1 歳) であった. このうち大細胞神経内分泌癌単独例 (Large Cell Neuroendocrine Carcinoma, 以下純型 LCNEC) が 4 例, 混合型 LCNEC が 5 例 (腺癌 + LCNEC 4 例, 腺癌 + 扁平上皮癌 + LCNEC 1 例) であり, 合併疾患として紅皮症, 肺線維症, 気腫性肺嚢胞などが特徴的であった. 病理組織像では全例にロゼット形成が認められた. 神経内分泌マーカーの免疫染色では, Synaptophysin 陽性が 7 例, Chromogranin A 陽性が 7 例, NSE 陽性が 4 例であり, 全ての症例でいずれかが陽性であったのに対し, 血清中の腫瘍・神経内分泌マーカーは NSE 高値が 1 例のみで, ProGRP 高値例は認められなかった. 術後病理病期は, I 期 4 例, II 期 2 例, IIIA 期 1 例, IIIB 期 1 例, IV 期 1 例であった. 純型 LCNEC の 4 例中 1 例が再発無く生存, 1 例が他病死, 2 例が癌死で, 癌死例の 2 例はいずれも術後の病理病期が I 期であったにもかかわらず, 術後生存期間は 13.6 ヶ月及び 9.8 ヶ月と予後不良であった. 混合型 LCNEC の 5 例中, 生存は 3 例, 癌死は 2 例 (生存期間 6.53, 7.83 ヶ月) であった. 52.9 ヶ月の生存例は, 術前の気管支鏡による細胞診にて小細胞癌の診断であったため, 術前に CBDCA + CPT-11 を 2 クール施行した. Neuroendocrine feature を伴った非小細胞肺癌である LCNEC は術前診断が困難であるとともに予後不良の傾向があり, 術後病理病期が早期の場合でも補助化学療法を考慮に入れておく必要があると考えられた.

PD-41 当教室での肺大細胞神経内分泌癌 (LCNEC) における多剤耐性蛋白の免疫組織学的検討日本医科大学 第 2 外科¹⁾, 日本医科大学病理²⁾○岡田大輔^{1,2)}, 川本雅司²⁾, 小泉 潔¹⁾, 原口秀司¹⁾, 平田知己¹⁾, 平井恭二¹⁾, 三上 巖¹⁾, 福島光浩¹⁾, 天神敏博¹⁾, 福田悠²⁾, 田中茂夫¹⁾

【目的】1999 年 WHO 肺腫瘍分類の改定に伴い LCNEC の概念が明確になった. 当教室での過去の外科的切除例 154 例 (低分化癌, 大細胞癌, 小細胞癌) を再分類した結果, LCNEC 10 例 (6.4%) を認め, その予後は過去の報告と比べ比較的良好であった¹⁾. これらの内, 6 例に術後化学療法が施行されていた. 外科的切除を含めた術後化学療法が LCNEC の予後に寄与した可能性を多剤耐性蛋白である P 糖鎖蛋白 (P-gp), GST- π , メタロチオネイン (MT) の免疫組織学的検討から評価した. 【対象と方法】男性 8 例, 女性 2 例. 年齢は 58~75 歳. 平均年齢 67.9 歳. 病理病期は 1A 期 1 例, 1B 期 3 例, 2B 期 1 例, 3A 期 4 例, 3B 期 1 例. 術後化学療法施行例 6 例. ABC 法にてパラフィンブロックを用いて P-gp, GST- π , MT の免疫組織染色を施行し腫瘍最大断面の全腫瘍細胞における陽性細胞の比率を観察した. 【結果】全 LCNEC 例の生存期間は 1.9~78.0 ヶ月. 内, 1 例癌死, 1 例他病死, 1 例術死. P-gp; $0.2 \pm 0.6\%$, GST- π ; $17.7 \pm 26.6\%$, MT; $12.4 \pm 14.9\%$. GST- π , MT は陽性率にばらつきがあるも, P-gp に関してはほぼ陰性であることから薬剤耐性の面から術後化学療法が寄与した可能性が示唆された. 【結論】当教室における LCNEC 症例において外科的手術を含めた集学的治療が予後改善に寄与した可能性が示唆された. 1) High survival rate of 6 cases of pulmonary large cell neuroendocrine carcinoma formerly classified as small cell carcinoma. Miho Yamanishi et.al; JNMS, 2001 (in press)

PD-40 Large cell neuroendocrine carcinoma 手術症例の検討

大阪市立総合医療センター呼吸器外科

○東条 尚, 多田弘人, 山本良二, 貴志彰宏, 井上 健, 林明夫

大阪市立総合医療センター 呼吸器外科 1), 病理部 2) 東条尚 1), 多田弘人 1), 山本良二 1), 貴志彰宏 1), 林明夫 1), 井上 健 2) 【目的】1999 年の WHO 分類では独立した組織型として大細胞癌の中に分類された Large cell neuroendocrine carcinoma (LCNEC) は症例数も少なくその Clinical behavior もはっきりしてはいない. 今回我々は術後標本で LCNEC と診断された手術症例の臨床像を retrospective に検討したので報告する. 【対象】1994 年 1 月から 2001 年 6 月まで当院の肺癌手術例 953 例中を再検したところ LCNEC は 32 例, 3.4% であった. 男性 27 例 (84.4%), 女性 5 例, 年齢は 49 歳~81 歳 (平均 66.7 ± 9.4 歳), 切除標本による病理病期は IA 期 9 例 (28.0%), IB 期 5 例 (15.6%), IIA 期 2 例 (6.3%), IIB 期 3 例 (9.4%), IIIA 期 10 例 (31.3%), IIIB 期 1 例 (3.1%), IV 期 2 例 (6.3%) であった. 【結果】初回診断が小細胞肺癌であった半数 (8/16 例) が術後標本で LCNEC と診断された. 30 例 (93.7%) が smoker で, 血中腫瘍マーカーは 17 例 (53%) (CEA 14 例, NSE 5 例, Pro-GRP 7 例) が陽性であった. 腫瘍の大きさは 13~140mm で平均 $39\text{mm} \pm 25.2\text{mm}$ であった. 術前化学療法を 3 例, 術後化学療法を 9 例, 放射線療法を 2 例に行った. Stage I 期の 5 年生存率は 50.8% であった. 【まとめ】全肺癌切除症例中 3.4% に LCNEC を認め, 小細胞肺癌の診断で手術を行った半数が (8/16 例) 術後標本で LCNEC と診断された. Stage I 期の 5 年生存率は 50.8% であり予後不良な疾患であると思われた.